

梶田萬理子特任教授が着任されました

本年4月より教育システム研究開発センターに梶田萬理子先生が特任教授として着任されました。梶田先生は30年以上にわたって本学附属小学校に勤務され、国語の名教師として全国的に知られた存在であると同時に、本学附属小学校の伝統である「奈良の学習法」に関する第一人者の一人です。本センターでは、現在進めている幼小一貫教育の指導をはじめとして、本学附属の研究・広報や附属校園と大学とをつなぐ活動に、その貴重なお力をお借りしたいと考え、お招きすることになりました。



ご挨拶

教育システム研究開発センター特任教授 梶田萬理子

4月より教育システム研究開発センターの特任教員として新たな籍をいただきました。私は、3月末に定年退職した本学の附属小学校で31年間勤めて参りました。長きにわたり、子どもが生きる学校で勤められたことや、新たな任務をいただいたことに感謝し、今後は、本学附属校園のために微力ながら知恵を絞っていきたいと考えています。

特に、初等教育について学んだことをもとに、附属幼稚園や小学校の先生方、幼児や児童に関わりながら、幼小一貫教育の取り組みの推進に努める所存です。また、附属小学校に着任された先生方が、子どもたちの人生の礎をつくる大事な時期に必要な力を育てる「奈良の学習法」を継承・発展させていけるようサポートしていきたいと考えています。その他に、教育実習生の相談や、本学附属校園の教育実践に関する研究や広報活動に携わっていけるよう努力いたします。

さて、小学校教員時代の目まぐるしく過ぎ去った日々をふり返りますと、子どもたちが本気になって、熱中したり没頭したりする環境は、どうあるべきか試行錯誤しながら歩んできた道のりであったように思います。それは、楽しくもあり真剣勝負でもあり、私自身が誠実に生きることでもありました。子どもたち一人ひとりが違うことのおもしろさや難しさ、点数で評価されないものを歴史的に大事に育ててきた学校独自の教育活動に今更ながら、その意義の深さを感じています。自分の使命を新ためて確認し、この職を楽しみたいと心を弾ませています。

最後になりましたが、附属小学校副校長の責を任された4年間のおかげで、本学の先生方ともお出合いする貴重な機会に恵まれました。

今後もご縁がありますように、どうぞよろしくお願いいたします。

■ 2012年度教育システム研究開発センターの事業報告

1. 附属幼稚園・小学校における幼小一貫教育カリキュラムの研究

幼小一貫教育カリキュラムの研究開発の一つの要となる評価方法についての検討を引き続き行った。具体的には、5歳児から7歳児までの3年齢について、野外観察した昆虫のスケッチと野外観察のふり返りとなる作文もしくは発話記録のルーブリック評価を、附属幼小の教育システム研究開発センター員及び評価部会員の合同で行った。描画や作文などの「作品」の評価は、芸術表現もしくは自己表現と見られがちで一般的に困難であり、

現実観察に基づく思考の変化をいかに評価するかが課題であった。5歳児では、例えば、昆虫の頭部を「笑顔マーク」で描いたり足を4本だけでもしくは多数描いたりするような、対象の観察不足と図式的表現が目立った。そこから、6歳児において客観的描写に近づける努力の見られる描画が現れ、7歳児には昆虫の身体構造の客観的な描写、そして、身体各部位の機能への意識の萌芽の感じられる描画がみられた。3ないし4段階の評価が可能であり、これらの評価は教員間で十分に共有可能であった。今後、このような作業を日常的に行うためのシステム作りが課題となっている。

2. 附属中等教育学校のSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）への協力

今年度、SSHについて三つの支援を行った。第一に、西村センター長が運営指導委員を務め、SSH全般に関する運営指導、助言を行った。第二に、SSHの柱の一つであるリベラルアーツ教育を目指す新設教科「コロキウム」について、田中附属中等教育学校教諭が担当する講座「数学と「私」」にて、辻センター員・鮫島センター員が臨床教育学的視点に基づいて、講座内容の検討および教育的意味を深める支援を行った（『教育システム研究』第8号にて、その一端を紹介している）。第三は、当初の計画に入っていなかった支援である。「コロキウム」のもう一つの講座「身体観を磨く」において、担当者である中川教諭の産休に伴い、10月以降、甲斐センター員が同講座のコーディネーターを務め、学習活動を展開した。今年度ほど、大学附属であることの強味が活かされた年はなかったと言えよう。

3. 高等教育研究プロジェクト：大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成

昨年度より始めたインタビューシリーズを継続し、野村鮎子先生（文学部）、松岡悦子先生（生活環境学部）、寺岡伸吾先生（文学部）、鈴木広光先生（文学部）、遊佐陽一先生（理学部）、高村仁知先生（生活環境学部）、棚瀬知明先生（理学部）、谷口洋先生（文学部）、吉村倫一先生（理学部）のインタビュー記事をニューズレター第21～27号に掲載した。また、本学学生の入学から卒業までの履修状況を把握するためサンプリング調査を実施した。これらの研究を踏まえて、具体的な教養教育カリキュラム試案を作成し、2013年1月30日付で野口誠之学長、中島道男副学長・教育計画室長に「奈良女子大学における新たな教養教育に関する素案（高等教育研究プロジェクト中間報告）」を提出した（ニューズレター第28号に掲載）。その上で、新年度より成案化を目指した全学的な議論の場として、数回にわたるフォーラムを企画中である。

4. 文部科学省「教員養成機能の充実」プロジェクト：附属学校での質の高い教育実習による現代的教育課題に対応した教員養成の改革

表記プロジェクトの一環として、本学の教員志望学生が附属校園の先進的な教育実践に参加する「スーパー教育実習」が、センターの企画・運営により、以下の3つのプログラムにおいて実施された。

① SSHの国際交流プログラム SCoPE (Science Communication Program for Every student)

2012年8月17日～8月23日に開催された韓国、台湾、

シンガポール、日本の4か国の高校生による理数科教育ワークショップにサポーターとして8名が参画した。

② 幼小一貫教育プログラム「なかよし広場」

2012年10月～12月に、4名の学生が「なかよし広場」の実施および事後評価（児童の作品・記録のデータ整理）に参画した。

③ SSHの国際交流プログラム ASTY Camp (Asia Science and Technology Youth Camp)

2013年3月23日～3月29日に韓国で開催された高校生による理数科教育ワークショップにサポーターとして5名が参画した。

5. 高大連携特別教育プログラムのフォローアップ

前期は2012年4月11日に「新入生ガイダンス」および「2・3回生ガイダンスおよびフォローアップ」を実施した。後期は12月17日に合格者に対する「入学前ガイダンス」を実施すると共に、1～3回生に対しては後期開始時にアドバイザーの先生方に個別面談をしていただき、併せて大学での学習と生活に関するアンケートを実施した。

6. 国立大学協会「震災復興・日本再生支援事業」：問題解決力を備えた次世代を担う中高生の育成事業

附属中等教育学校には、東日本大震災の復興支援に関わる有志生徒のグループがある。2012年度の活動の一つとして、教育システム研究開発センターの支援を受け、8月に福島県いわき市、3月に宮城県気仙沼市で開催されたOECD東北スクールに参加した。主たる活動は、被災地の中高生が一堂に会し、「巨大ドミノ」や「がれきアート」などのイベント（パリでの開催）の実現に向けた熟議への参加であった。その際、ソフトバンクモバイル社よりiPad100台の無償貸借を受け、遠方地域の生徒たちとのコラボレーションを行った。本校の生徒たちは、熟議への参加・議事録の作成など、エンパワーメントパートナーとしての役割を果たした。

7. ニューズレター、ホームページ、センター紀要による情報・研究成果の発信

ニューズレターは第21号から第28号まで8回発行し、その都度ホームページにアップして発信した。センター紀要の『教育システム研究』は第8号を年度末に発行した。総ページ数は203ページ。目次は以下（4頁に掲載）の通りである。なお、今年度より大学教員への全員配布は取りやめ、チラシで内容を紹介してウェブ上で閲覧してもらう形式に変更した。

■ センター員・センター運営委員

センター長	西村 拓生	文学部
センター員・センター運営委員	天ヶ瀬 正博	文学部
	鈴木 康史	文学部
	藤井 康之	文学部
	保田 卓	文学部 (文学部選出運営委員)
	辻 敦子	文学部
	中沢 隆	理学部
	根岸 裕子	生活環境学部 (生活環境学部選出運営委員)
	武田 章	附属中等教育学校
	北尾 悟	附属中等教育学校
	河田 慎太郎	附属小学校
	木村 光男	附属小学校
	柿元 みはる	附属幼稚園
センター運営委員	山内 茂雄	理学部選出
	谷口 雅彦	人間文化研究科選出
センター特任教授	梶田 萬理子	教育システム研究開発センター
センター特任助教	盧 珠妍	教育システム研究開発センター

学内から附属学校園への
連携計画依頼について

学内から附属学校園への研究協力依頼は、教育システム研究開発センターの各学部のセンター員を通して、「連携研究依頼状」を、実施責任者による記入・捺印の上、ご提出ください。

また、大学と附属学校園の連携の実績を記録するため、「連携研究報告書」を、研究実施年度の年度末までに、学内便にて学務課を通して総務・企画課附属学校係まで提出してください。

「連携研究依頼状」および「連携研究報告書」は、教育システム研究開発センターのホームページに掲載しています。メニューから「学内から附属学校園への連携研究依頼について」のページへ進んでください。

■ 2013 年度教育システム研究開発センター事業予定

1. 附属幼稚園・小学校における幼小一貫教育カリキュラムの研究

・今年度は、再度の文部科学省研究開発学校の申請に向け、「創造力の育成」をテーマに実践と研究を進める予定である。

2. 附属中等教育学校のSSHへの協力

・SSH全般に関する運営指導、助言
・中等教育におけるリベラルアーツ教育を目指す新設科目「コロキウム」の企画・運営・検討のサポート
・「コロキウム」における若手教員のキャリア形成過程に関する臨床教育学的研究

3. 高等教育研究プロジェクト：大学の「機能分化」状況における専門教育と教養教育との創造的再構成

・前年度末の中間報告を踏まえ、フォーラムの開催やインタビューシリーズの継続などを通じた教養教育の

あり方に関する全学的な議論を推進し、教育計画室と連携して成案を得た上で、その具体化を目指す。

4. 教育実習に関する臨床教育学的研究

・2007年度より実施している「教育実習体験の振り返りに関する臨床教育学的研究」を継続すると共に、今年度から実施される「教職実践演習」や「スーパー教育実習」（前年度から規模を縮小して継続予定）に、その成果の応用を試みる。

5. 高大連携特別教育プログラムのフォローアップ

・例年通りガイダンス等のフォローアップと、プログラム評価のためのデータ収集（アンケート等）を実施する。

6. ニュースレター、ホームページ、センター紀要による情報・研究成果の発信

■ 教育システム研究センターの紀要『教育システム研究』の第8号を発行しました。

昨年度より、全学の教員への配布は取りやめ、ネット上で閲覧していただく形式に変更いたしました。以下に目次を掲載しますので、お読みいただく場合はセンターのホームページ(<http://www.nara-wu.ac.jp/crades/>)をご覧ください。また、冊子体をご希望の場合はセンターまでご連絡ください。

『教育システム研究』第8号 目次

第1部 研究論文

- 教育実習体験の振り返りに関する臨床教育学的検討(5)
 ——教員養成機能の「高度化」をめぐる課題検討へ向けて 鈴木卓治
 キーコンピテンシーからみた学校教育の課題——「生きづらさ」と共有するために 岸優子
 望ましい人間関係を形成する特別活動——実践例の分析から 保田卓
 近年の教育課程論領域におけるポートフォリオ研究——国内の実践報告を中心に 保田卓
 幼少交流活動における子どもの意思の表出と遂行——課題遂行と関係性維持と個人の参加欲求をめぐる
 藤村ゆうみ・本山方子・西下旬也・辻岡美希・河田慎太郎
 幼稚園4歳児の相互作用場面における「問題児」の出現 松原未季・本山方子
 ある青年の生活史の「語り」——教育実践を評価するための臨床教育学方法についての研究
 鮫島京一

第2部 実践報告

- 豊かに表現する喜びを育てる——3歳児の事例から 津村樹里
 説明文教材を通して、「自ら学ぶ」子どもを育てる 大野智子
 2012年度・附属中等教育学校・公開研究会・分科会3——『コロキウム』の試み』の記録 田中由佳子

第3部 年次活動報告(2011年度)

1. 学内連携
 - (1) 文部科学省研究開発校指定研究「幼少一貫教育において『読解と表現をくつなぐ』論理的思考力」を育成する教育課程の研究開発」平成23年度研究開発実施報告
 - (2) 高大連携特別教育プログラム
2. 学外連携
 - (1) 学校訪問・参観者記録
 - (2) 公開研究会報告
3. 教育支援
 - (1) 教職科目担当
 - (2) 教育実習受け入れ
 - (3) 長期研修受け入れ
4. 専門教育への連携協力

全学フォーラム：奈良女子大学における 教養教育の再構築のために

第1回 「教養」の意味を問い直す ——日本の高等教育の現状と奈良女子大学

日時：2013年5月17日(金)
 16時30分～18時30分

場所：A棟 理学部会議室

あいさつ：今岡春樹学長

司会：小路田泰直副学長

話題提供：生活環境学部 植野洋志

文学部 西村拓生(教育システム
 研究開発センター長)

国立大学に「ミッションの再定義」が迫られる
 今、専門教育と教養教育のあり方を問い直し、
 奈良女らしい生き残り方を模索しませんか？
 ぜひ議論にご参加ください。

■ 奈良女子大学教育システム研究開発センターニュースレター 29 ■

2013年4月30日発行

奈良女子大学教育システム研究開発センター

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋東町

奈良女子大学コラボレーションセンター 204

TEL：0742-20-3352

Website：http://www.nara-wu.ac.jp/crades/

E-mail：crades@cc.nara-wu.ac.jp